

平成 21 年度入学試験

## 一 般 学 科 試 験

桐朋学園大学音楽学部

Ⅰ～Ⅱの各設問すべてに取り組み、それぞれの答を解答用紙の  
所定の箇所に書きなさい。

### 注意事項

1. 問題用紙に落丁などある場合は、挙手をして申し出てください。
2. 退出は試験開始後 61 分経過してから可能です。ただし、終了時刻 5 分前以降の退出は、混乱を避けるために、認められません。
3. 終了時間前に退出する場合は、解答用紙の上に問題用紙を重ねて机の上に置き、挙手をして試験監督の許可を得て、静かに退出してください。

Ⅰ・1 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

私は彫刻家である。

多分そのせいであろうが、私にとってこの世界は触覚である。触覚はいちばん①ヨウチな感覚だといわれているが、しかしそれだからいちばん根源的なものであるともいえる。彫刻はいちばん根源的な芸術である。

私の薬指の腹は、磨いた鏡面の凹凸を触知する。これはこの頃②グウゼンに気がついたことであるが、ガラスにも横・縦がある。眼をつぶって普通の玻璃面をなでてみると、それは丁度木目の通った桐のサツマ下駄のようなものである。磨いた鏡面はさすがにサツマ下駄のようでもないが、わずか五寸に足りない長さの間にも二つ程の波がある事を指の腹は知るのである。傾斜の感覚を薬指は持っているであろう。鏡面の波動を感じる味わいは、丁度船のおだやかなピッチングのようである。少し快よい眩暈を感じさせる程度である。

1 人は五官というが、私には五官の境界がはつきりしない。空は碧いという。けれども私はいう事が出来る、空はキメが細かいと。秋の雲は白いという。白いには違いないが、同時に、それは公孫樹の木材を斜めに削った③光沢があり、春の綿雲の、木曾の檜の板目とはまるで違う。考えてみると、色彩が触覚なのは当りまえである。光波の震動が網膜を刺戟するのは純粋に運動の原理によるのであろう。絵画におけるトオンの感じも、気がついてみれば触覚である。口ではいえないが、トオンのある絵画には、ある触覚上の玄妙がある。トオンを持たない画面には、指にひつかかる真綿の糸のようなものがふけ立っていたり、又はガラスの破片を踏んだ踵のような痛さがあるのである。色彩が触覚でなかったら、画面は永久にべちやんこでいるであろうと想像される。

2 音楽が触覚の芸術である事は今さら言うまでもないであろう。私は音楽をきく時、全身できくのである。音楽は全存在を打つ。だから音楽には音の方向が必要である。蓄音機やラジオの音楽が大した役を為さないのは、それが音の方向を持たないからである。どんなに精巧な機械から出て来てもこの複製音は平たい。四方から来ない。音楽堂の実物の音楽は、そこへゆくと、たとい④掘くとも生きていく。音が縦横に飛んで全身を包んで叩く。音楽が私を夢中にさせる功德を、ただ唯心的にのみ私は取らない。それはかかる運動の恐ろしい力が本になっているのである。私は昔、伊太利のある寺院で復活祭前後に聴いたあの大オルガンの音を忘れない。私はその音を足の裏から聴いたと思った。その音は全身を下の方から貫いて来て、腹部の何処かで共鳴音を造りながら私の心に届いたようにおぼえている。

私はかつて帝劇で、シユウマン・ハインクのお婆さんの歌をきいた。その歌の巧拙はしばらく措いても、その声のキメの細かさ、⑤緻密さ、匂やかさ、そうして、丁度刀を鍛える時に、地金を折り返しては打ち、折り返しては⑥練ったあとのような何とも言えぬ頼もしいねばり強さと、奥深さとに驚嘆した。その声をきいてから、他の歌うたいの声をきくと、<sup>3</sup>あまり筒抜け過ぎて、その歌が煙突から出るもののようにしか響かなかった。いつでも私の触覚は音楽をきく時の第一関門となるのである。

香とは微分子なのだそうである。肥くさいのは肥の微分子が飛びこむのだそうである。道理で私は香をも肌でかぐ。万物に匂いの無いものはない。してみれば万物は常にその微分子を放散させているのである。自ら形骸を滅尽しつつあるのである。滅尽の度の早いのが香料だというだけである。微分子があまり一度に多量に飛びこむと圧迫される。香料は皆言わば稀薄である。香水の原料は悪臭である。所謂オリジナルは屍人くさく、麝香は嘔吐を催させ、伽羅の煙はけむったい油煙に過ぎず、百合花の花粉は頭痛を起させる。嗅覚とは生理上にも鼻の粘膜の触覚であるに違いない。だから連想的形容詞でなく、厚ぼったい匂いや、ざらざらな匂いや、すべすべな匂いや、ねとねとな匂いや、おしやべりな匂いや、屹立した匂いや、やけどする匂いがあるのである。

味覚はもちろん触覚である。甘いも、辛いも、酸いも、あまり大まかな名称で、実は味わいを計る真の観念とはなりがたい。キントンの甘いのはキントンだけの持つ一種の味的触覚に過ぎない。入れた砂糖の延長ではない。

乾いた砂糖は湿った砂糖ではない。印度人がカレイドライスを指で味わい、そば好きがそばを咽喉で味わい、鮓を箸で食べない人のあるのは常識である。調理の妙とはトオンである。色彩におけるトオンと別種のものではない。

五官は互に共通しているというよりも、ほとんど全く触覚に統一せられている。所謂第六官といわれる位置の感覚も、もとより同根である。水平、垂直の感覚を、彫刻家はねそべつていても知る。大工はさげふりと差金で柱や桁を測る。彫刻家は眼の触覚が掴む。所謂太刀風を知らなければ彫刻は形を成さない。

彫刻家は物を掴みたがる。掴んだ感じで万象を見たがる。彼の眼には万象が所謂「絵のよう」には映って来ない。彼は月を撫でてみる。焚火にあたるように太陽にあたる。樹木は確かに一本ずつ立っている。地面は確かにがっしりそこにある。風景はどこをみても微妙に組み立てられている。人体のように骨組がある。筋肉がある。肌がある。そうして、均衡があり、機構がある。重さがあり、軽さがある。突きとめたものがある。

ここに一つの詩がある。こんな風に一人の彫刻家は人生をまでも観る。

或男はイエスの懐に手を入れて二つの創痕を撫でてみた

一人のかたくなな彫刻家は

万象をおのれ自身の指で触ってみる

水を裂いて中をのぞき

天を割って入りこまうとする

ほんとに君をつかまへてからはじめて君を君だと思ふ

彫刻家が君をつかまえるという時、それは君の裸をつかまえるという事を意味する。人間同志は案外相互の裸を知らないものである。実に荷に余るほどのものを沢山着込んで生きている。彫刻家はその附属物をみんな取ってしまった君自身だけを見たがるのである。一人の碩学がある。その深博な学問はその人自身ではない。その人自身の裸はもっと内奥の処にあたたかく生きている。カントの哲学はカント自身ではない。カント自身はその哲学を貫く④チュウジクの奥に一個の存在として生きている。厨川白村の該博な知識は彼自身ではない。彼自身は別個の存在として著書堆積裏に蟠居している。その人の裸がその学問と切り離せない程偉大な事もある。又その学問の下に聖読庸行、見るも醜怪な姿をしている事もある。世上で人が人を見る時、多くの場合、その閱歴を、その勲章を、その業績を、その才能を、その思想を、その主張を、その道徳を、その気質、又はその性格を見る。

彫刻家は4 そういうものを一先ず取り去る。奪い得るものは最後のものまでも奪い取る。そのあとに残るものをつかまうとする。そこまで突きとめないうちは、君を君だと思わないのである。

人間の5 最後に残るもの、どうしても取り去る事の出来ないもの、外側からは手のつけられないもの、当人自身でも左右し得ぬもの、中から育つより外仕方の無いもの、従って縦横無礙なもの、何にも無くして実存するもの、この名状しがたい人間の裸を彫刻家は観破したがるのである。だが裸は埋没され丁寧に匿されているのが常である。善いにせよ、悪いにせよ、それが事実である。いくら理想家でも、人間に即刻裸で歩けとはいえないであろう。実に人世とは裸を埋没させる道場かと思えるばかりだ。しかし、着物が多くても少くても実際は構わない程、結局するところ、人はのがれられないものである。価値を絶したところに、その人の真の姿があらわれて来る。彫刻家はこの無価値に触れたがる。なるほど人生には敵味方がある。又その故に社会は進展する。けれども彫刻家の触覚はもつとその奥の処にごつつりしたものを探らうとする。6 だから彼の見方は大抵の場合この現世に逆行する。現世を縦に割る見方である。そこまでゆかないと落ちつかない。人生の裸をつかまえなければ、

人生を人生と思えない。人生の裸とはただ世間の真相をのみ意味するのではない。所謂現実暴露的な状態上の問題ではない。千万の現象そのものに、すぐ裸を見る力が欲しいのである。赤外線による写真には眼に見えないものが写るそうである。彫刻家の触覚は霧を破ろうとする。そして又霧は霧である事を確かに触知しようとする。

人生そのものには必ず裸がある。むしろ、眼を転ずれば人生そのままが既に裸だといえるのである。けれど人間の手になるものは必ずそうとも限らない。人間の手になる作品を見て、その中に実存する裸の力に触れるのは⑧ユカイである。作られ方の力ではない。又その傾向の力ではない。作られ方も傾向も皆充分⑨考慮に値する。けれども考慮は結局時代に関する。動かしがたいものを根源に探る触覚が、一番はじめに働き出す。その怪しいもの、もしくは無いものは掴むとつぶれる。いかに弱々しい、又は⑩ツマツらしい形をしたものでもこの根源のあるものはつぶれない。詩でいえば、例えばヴェルレエヌの嗟嘆はつぶれない。ホイットマンの非詩と称せられる詩もつぶれない。そんなものあつても無くてもいい時代が来てもつぶれない。通用しなくても生きている。性格や気質や道徳や思想や才能のあたりに根を置いている作品はあぶない。どうにもこうにもならない根源に立つもの、それだけが手応えを持つ。この手応えは精神を一新させる。それから千差万別の道が来る。

私にとって触覚は恐ろしい致命点である。

(高村光太郎著「触覚の世界」、小学館刊行『昭和文学全集第四巻』より。一部省略改訂)

注1 桐材の下駄の一種。

注2 約十五センチメートル。

注3 船が波によつて揺れること。

注4 色調のこと。

注5 オーストリア生まれの女性歌手。1936年没。

注6 大工の使う、L字形のものさし。

注7 十八世紀のドイツの哲学者。

注8 明治大正時代を代表する英文学者・思想家。

注9 わだかまり、うずくまること。

注10 立派な内容の書物を読んでいながら、いざ行動するとなると、平凡なことしかしないこと。

注11 十九世紀フランスの象徴詩人。

注12 十九世紀アメリカの詩人。詩集『草の葉』には、大胆な自由形式の詩が載せられている。

設問

問一 〰部①～⑩の漢字にはその読みを、カタカナはその漢字を書きなさい。(送りがなは書かなくてもよい。)

問二 傍線部1の「五官」は人間の五つの器官のことですが、その五つの器官による感覚を何といいますか。そのすべてを挙げなさい。

問三 傍線部2「音楽が触覚の芸術である事は今さら言うまでもないであろう」とありますが、そういうことがいえる筆者の音楽の聴き方を述べている部分を二十字以内(句読点を含む)で抜き出さなさい。

問四 傍線部3「あまり筒抜け過ぎて、その歌が煙突から出るもののようにしか響かなかった」という比喻表現は、どんなことをたとえていますか。本文から説明しなさい。

問五 傍線部4「そういうもの」とはなんですか。それが示されている箇所を本文から抜き出しなさい。

問六 傍線部5「最後に残るもの」とはなんですか。筆者はそれを二通りの言い方で述べていますが、一文字の言葉と三文字の言葉を書きなさい。

問七 傍線部6について、㊦「彼」とはだれですか。本文から答えなさい。また、㊧なぜ「この現世に逆行する」のですか。本文にそって簡単に説明しなさい。

問八 傍線部7「それ」とはなんですか。本文から漢字二字で答えなさい。

□1・2 次の①～⑤の傍線部の漢字の読みを書き、各故事成語の意味をア～オから選んで記号で答えなさい。

- ① 桃源郷に思いをはせる
- ② 地方へ左遷される
- ③ 鬼籍に入る
- ④ 青雲の志を抱く
- ⑤ 作家への登竜門

ア 人が亡くなること。

イ 立身出世して、高位高官に至ろうとする意気盛んな気持ち。

ウ 俗世間を離れた理想郷にあこがれること。

エ 難しいが突破できれば出世することができる関門。

オ 官位を低くして遠くに赴任させられること。

**Ⅱ** 次の各設問に答えなさい

問1. 次の英文を日本語に直しなさい。

1. I have never played that sonata before.
2. There is nothing to be afraid of.
3. Is this the speech made by the president?
4. What is important is to do it as soon as possible.
5. What a foolish thing I was going to do!
6. The happy people are those who are making something new.
7. I found it easy to realize the idea.
8. To live is to think.
9. I had to give up my plan because of some troubles.
10. It is good to stop to think, but it is not good to stop thinking.

問2. 次の日本語を英語に直しなさい。(数字も英語のスペルで書くこと。)

1. 彼は去年日本で音楽を学びました。
2. 来週2人のピアニストがこの学校を訪問する予定です。
3. 他人を助けることは簡単ではない。
4. 昨日5時にここで雨が降っていましたか？
5. 誰が次の大統領か知っていますか？

問3. 次の意見について、あなたの考えを5から6行程度の英語で答えなさい。

All is well that ends well.

解答用紙

|    |      |    |  |    |
|----|------|----|--|----|
| 専攻 | 受付番号 | 氏名 |  | 得点 |
|    |      |    |  |    |

I・1 解答欄

問一

|   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|
| ① | ② | ③ | ④ | ⑤ |
| ⑥ | ⑦ | ⑧ | ⑨ | ⑩ |

問二

|  |  |  |  |  |
|--|--|--|--|--|
|  |  |  |  |  |
|--|--|--|--|--|

問三

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|

問四

|  |
|--|
|  |
|  |
|  |

問五

|  |
|--|
|  |
|  |

問六

|  |  |  |
|--|--|--|
|  |  |  |
|--|--|--|

問七

⑦

|  |
|--|
|  |
|--|

⑧

|  |
|--|
|  |
|  |



問八

|  |  |
|--|--|
|  |  |
|--|--|

I・2 解答欄

|   | 漢字の読み | 記号 |   | 漢字の読み | 記号 |   | 漢字の読み | 記号 |
|---|-------|----|---|-------|----|---|-------|----|
| ① |       |    | ② |       |    | ③ |       |    |
| ④ |       |    | ⑤ |       |    |   |       |    |

II 解答欄

問1

|     |
|-----|
| 1.  |
| 2.  |
| 3.  |
| 4.  |
| 5.  |
| 6.  |
| 7.  |
| 8.  |
| 9.  |
| 10. |

問2

|    |
|----|
| 1. |
| 2. |
| 3. |
| 4. |
| 5. |

問3

|  |
|--|
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |